

イスラエルの軍事的ポテンシャル

東洋英和女学院大学名誉教授

池田明史

たった一日の攻撃で、かつてない一二〇〇人の死者。イスラエル社会・国家を震撼させたハマス攻撃は、国防軍の伝統的な軍事構想に大きな転換を迫った。空軍力、予備役を充実させてきた臨戦国家は、どこまで持ちこたえることができるのか。

いけだ あきふみ 一九五五年生まれ、東北大卒。八〇年アジア経済研究所入所。中東の現代政治分析を担当。イスラエル・ヘブライ大学、オックスフォード大学、トルーマン研究所で研究員や客員教授を務める。東洋英和女学院大学で教授、学長を務める。近著論文に「イスラエルの憂鬱 ユダヤ人国家を襲う内憂外患」など。

一〇月七日、パレスチナのガザ地区を実効支配するイスラム武装勢力ハマスは、突如としてイスラエル領内に数千発のロケット弾を撃ち込むと同時に、一〇〇〇人規模の地上戦闘員を越境させ、近隣のユダヤ人住宅を急襲した。ほぼこの一日だけで不意を衝かれたイスラエル側の死者は一二〇〇人を数え、あわせて約二四〇名の住民がガザに拉致されて人質となった。一九四八年の建国以来、イスラエルが戦争で最も多くの犠牲を払ったのは同国にとっての独立戦争である第一次中東戦争であった。六〇〇〇人以上の死者を出したが、それは四八年五月から翌年一月までの九カ月間での総数である。また、イスラエルがエジプトとシリアとに奇襲挟撃を受けて苦戦した第四次中東戦争においても、一七日間の戦闘で三〇〇〇人弱の死者を出してい

る。これらと比較すれば、たった一日で死者一二〇〇人という損害は、イスラエルの国家や社会にとってまさしく驚天動地の衝撃的数字と言わねばならない。さらに、領土を「確定」するための戦争であった第一次中東戦争を除けば、イスラエルの戦争はこれまで常に国外（占領地含む）で戦われてきた。これに対して、今回はハマスの戦闘員にイスラエル「固有」の領土（イスラエル・プロパ）への浸透攻撃を許し、これを撃退するまでイスラエル領内が戦場となったのである。これもまたイスラエルの国家や社会を震撼させるに足る事実であろう。

イスラエル国防軍——予備役主体の市民軍

建国直後から、これを認めない周辺のアラブ諸国すべて

との交戦状態に入ったイスラエルは、アラブ側に対して領土、人口、エネルギー資源、財政基盤、兵力といった基本的な条件において圧倒的な劣勢にあるという認識から出発せざるを得なかった。独立戦争で大きな損害を被りながらも辛うじて勝利し、固有の領土を獲得できた最大の要因は、アラブ諸国間の足並みの乱れであり、いわば敵失によって勝ちを拾ったようなものだと言え、徹底的に現実を見据えていた。戦前から活動していたいくつかの民兵集団を、最大勢力だったハガナ（「防衛」の意）が糾合し、指揮系統を統一して創設したのがイスラエル国防軍（IDF）である。アラブ側との絶対的な兵力差に対抗すべく、男女とも一八歳になれば徴兵され数年間の兵役に就くが、現役を除隊しても男子は五〇～五五歳まで（女子は結婚すれば免除）毎年一カ月程度の応召義務があり、常に練度を維持向上させることとなっている。この予備役がIDFの主力を構成しているのである。若い現役兵は、即応戦力となる予備役兵となるための教練を受けているのであって、イスラエルの軍事システムは、いったん緩急あれば急速かつ大量に動員される予備役の投入を前提に設計されている。予備役は国内の生産年齢人口の相当部分を占めているという意味で、イスラエルはまさしく国民皆兵の国家にほかならない。この

国では、兵士とは「制服を着た市民」であり、市民とは「年間一カ月の休暇中にある兵士」であると言われるゆえンである。

こうした予備役主兵の臨戦国家にあつては、動員期間の長期化はそのまま国家の経済や社会の機能不全に直結する。大兵力を動員したまま長期消耗戦に追い込まれるわけにはいかないし、国土が戦略的縦深性に欠けるため自国内で大規模な戦闘を展開することも避けなければならない。そのような戦闘に勝つても国土が荒廃することになれば、結局は戦争に負けることになりかねないからである。かくして、IDFの伝統的な戦略構想は、隣接する敵性国家からの軍事的脅威に直面した場合、まず空軍と常備軍（現役）で相手を国境線内外で食い止めておいて、主兵である予備役を大量に急速動員し、可及的速やかに前線へ投入するところから始まる。機動力に富んだ彼らの攻勢兵力によって初動後は主戦場を敵地に求め、戦闘期間を極力短縮させて決着を図るというシナリオが描かれる。いわゆる短期決戦主義である。このように、予備役を戦力の主兵とせざるを得ないイスラエルでは、いわゆる奇襲に対しては即応的にはきわめて脆弱な防御しかとれない。したがって、奇襲に対する早期警戒手段としても、予備役動員の時間を稼ぎ出

す必要からも、またそれら予備役を駆り立てて敵領内への機動攻勢を支援するためにも、強力な制空権を確保しておくことは必須となる。イスラエルの軍事投資が空軍偏重となるのは、こうした事情による。

脅威主体の変遷と軍事構想の変貌

以上のようなIDFの伝統的な軍事構想は、近年の戦略環境の激変によって大きな転換を余儀なくされつつある。戦略環境の激変とは、第一に、過激で暴力的な重武装の非国家主体の脅威が、イスラエルに隣接する諸国家の軍事的脅威と入れ替わったことである。レバノンのヒズボラやガザのハマスがその典型とされる。第二に、こうした脅威はいまやイスラエルの都市部人口集中地域や戦略的中枢部を十分な火力によって打撃でき、国家の社会的抗堪性や継戦能力を阻害する能力を持つ。第三に、これらの脅威は、イスラエルからの反撃や報復を回避し、あるいはその自衛権の主張の正統性の剥奪を企図して、非戦闘地域ないし住民密集地を策源地とし、意図的にそこから攻撃を発起する。脅威主体の変遷に伴って、抑止、早期警戒、短期決戦といったイスラエルの軍事構想の根幹をなす概念も再定義を迫られることとなった。伝統的な抑止概念は、隣接する敵

性国家との間の緊張関係が全面戦争に展開することを回避する手段として構想され、実施された。そこでは、戦時と平時との比較的明確な状況区分があり得た。脅威主体の変容は、戦時と平時との区分が限りなく曖昧化するような事態が恒常化したことを意味する。抑止とはすなわち、ヒズボラやハマスが高度先端兵器等の調達といった戦力増強の企図を事前に察知し、これを粉碎する公然・非公然の武力行使を指すこととなった。これをIDFは「戦間期戦闘行動 (Campaign between Wars : CBW) と呼ぶのである。早期警戒概念も伝統的な空中偵察や電波傍受などに代わって、いわゆるサイバー戦など情報戦能力の高度化と同義になった。このためにIDFは、各級司令部に分散していたC4I (指揮・統制・通信・コンピュータ・諜報) 部局を統括的に一元化したサイバー戦司令部を新設し、全般の指揮権を与えている。さらに、CBWという新たな概念の登場が物語る通り、イスラエルは好むと好まざるとにかかわらず脅威主体との長期持久・消耗戦を強いられる結果となった。しかし、これに勝ち残るためには、短期戦の累積的勝利が求められる。レバノン、シリア、ガザ、西岸といったイスラエル本国の外で繰り返し短期的勝利を積み重ねることによって、抑止を達成すると同時に長期的安全保障も

「日暮れて道なお遠し」

担保できるとIDFは構想する。そこで累積される短期的勝利とは、「軍事作戦の政治的目標が達成されると同時に、作戦の結果、作戦発動以前よりも安全保障環境が好転している事態」を意味する。短期決戦主義というIDFの伝統的概念もまた、換骨奪胎されて再定義されることとなった。

既述のように、イスラエルの場合は戦時において予備役を急速大量に動員し、敵領内に進攻して短期決戦で決着をつけるというシナリオが国防それ自体であった。そこでは国土後背地や都市部など人口密集地の「防護」は、攻勢至上主義の前にいわば等閑視されていた。国内の戦略拠点の防護が必要になるような事態になれば、予備役主体の市民軍IDFの動員・招集システムが機能しなくなり、その時点で万事休すだとの認識が存在したからである。しかし累

次のガザとの戦闘や二〇〇六年のヒズボラ戦争などにおいて、ロケットやミサイルが現実にはイスラエル内奥の目標に着弾するようになると、これらの経空脅威に対する防護システムの構築は不可避となり、「アイアン・ドーム」や「アロー」などを用いた複層的対空迎撃システムが開発され展開されることとなった。もとより、これによっても人口密

集地や戦略拠点のすべてを網羅的にカバーできるわけではなく、防衛優先序列を設定して対処するほかない。

冒頭述べたように今般のハマスによる奇襲は、一日の攻撃としてはイスラエル史上最大の死者を出したことで、加えて史上最多の人質を拉致されたこと、これらの攻撃が純然たるイスラエル国内で加えられたこと、などによって深刻な衝撃をイスラエル国民に与えている。同時に、IDFが標榜してきた抑止が機能せず、攻撃の兆候を把握できなかった（早期警戒に失敗）。都市部に大量のロケットが着弾した事実も残る（防護の不全）。軍事作戦の行方がどうなるかと、ネタニヤフ首相を筆頭に、内閣やIDF指導部の責任を問う声が高まるのは必至である。

さらに、ガザ制圧に向けての地上戦の展開、北方の脅威であるヒズボラ（レバノン）、イラン革命防衛隊（シリア）への備え、西岸の治安悪化への対処と、イスラエルはこれから三正面に展開するため三六万人にもおよぶ予備役を動員している。この規模の動員を維持できるのはせいぜい数カ月であり、遅くとも年内には部分的にもせよ動員解除に道筋をつけないければならない。「ハマスの壊滅」と「人質の奪還」という作戦目的の達成はなお遠く、イスラエルに残された時間は短い。●